

7 沿岸重要資源動態調査

担当者	主任研究員	豊川	毅
	漁業課長	浅加	信雄
	技師	赤羽	光秋
	技師	十三	邦昭
	技師	富永	武治

I, 調査目的

本調査は本県沖に来遊する沿岸重要資源のうち最も重要なスルメイカおよびサバの資源量、回遊経路、生態等について調査研究をおこない特にスルメイカについては漁海況予報事業とあわせて漁業経営の安定に寄与しようとするものである。

II, 調査内容

- (1) 調査期間 昭和43年6月13日～12月7日
- (2) 調査場所 (イ) 海上調査、本県太平洋沖合
(ロ) 陸上調査、八戸市
- (3) 調査項目 (イ) 海上調査、(海況調査ならびに漁業試験)
(ロ) スルメイカ漁況調査(標本船調査ならびに市場調査)
- (4) 調査方法 (イ) 調査船瑞鷗丸および東奥丸によつて実施した。
(調査漁具完全自動イカ釣機(サンパン)2台、ダブル式手動イカ釣機6台)
(ロ) 標本船並びに市場において資料収集をおこなう一方スルメイカの魚体調査を実施した。

III, 調査結果

(1) 海上調査

本調査は太平洋スルメイカ漁業試験と事業内容が重複するため省略する。

(2) 陸上調査

本調査は前述したとおり、漁海況予報事業との関連から、八戸市に調査員を常駐させ毎日の漁況速報を主たる業務とした。スルメイカについては東北水産研究所八戸支所の協力を得て多項目調査を実施した。

漁況については毎日取まとめ、日報として一般漁船向け情報として流したが、これを各月毎に通観すれば下記のとおりである。

本年度における本県太平洋側におけるスルメイカ漁はここ数年にみられない初期における異常冷水が沖合に停滞したこともあつて、漁期の遅れが目立つた。昨年は6月初旬に鮫沖で初漁があり、引続き6月中旬から好漁が見られたが、本年の初漁は6月13日であつた。漁獲量は僅少で、6月下旬に至つてもこの傾向が続き7月初旬に入つて漸く本格的な夏イカ漁

が始まった。6月中のイカは型も不揃いで、浮上遊泳する小集団を集めて表層釣りをすると
 いった具合で、来遊資源量自体が極めて少なかったと考えられる。しかし7月1日以降は来
 遊資源量は、急激に増加し例年の主漁場である鮫角W E～S Eにかけて操業されたが、7月初
 旬後半に尻屋～尻岸沖で昼釣によるかなりの好漁があつたのは、例年とは大分変つた漁況で
 あつた。7月初旬における漁場水温は表層では、ほぼ例年なみの15°C前後になつたが、100
 m層以深ではかなり底温で6°C～8°C以下であつた。7月中旬に至つて道東方面が好漁を続
 けているところから、漁場が分散し、その方面への出漁船が多くなり、八戸前沖の漁況がな
 お好調であつたにもかかわらず、出漁集数は少くなり、総体的な近海イカの水揚げはそれほ
 ど多くはなかつた。しかし、7月、8月にかけて、やや変動の多い漁況であつたが出船1隻
 当りの漁獲量は平均2.8トン程度で、豊漁であつた42年の夏イカの場合のそれと同じ水準
 を示し好漁であつた。9月は例年であれば、漁切れがはつきり現われるが、本年の場合は9
 月もやや漁が少くなつたという程度で、はつきりと漁切れは現われず、そのまま秋イカ漁に
 入つたので、夏イカ漁と秋イカ漁の区分が明瞭でなかつた。このことは日本海においても同
 様で、津軽海峡域の大畑でも同様の傾向を示したことから、初漁期の漁期の遅れと関連して
 いるように考えられる。10月は9月から引続いて漁況は順調でこの傾向は更に11月中旬
 まで続いたが、11月下旬八戸沖におけるサバ旋網漁の終漁と共にスルメイカの漁期も終漁
 となつた。このことは9月下旬函館市において開催されたスルメイカ長期予報会議での予報
 とも合致する漁況であつたが、一般には12月中も引続き中旬頃までは、好漁のあることを
 期待した向も多く、このため43年におけるスルメイカ漁が不漁に終つたかの印象を与えた。
 本年の八戸におけるスルメイカの月毎漁獲量を示せば次のとおりである。

43年八戸港におけるスルメイカ漁獲量(月別)

単位トン

項目	月別	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
漁獲量		36	13,998	4,203	10,816	11,897	18,429	1,683
隻数		69	14,621	1,696	4,081	4,955	8,478	936

IV. 考 察

- (1) 本年における、太平洋沿岸へのスルメイカの来遊状況は、初漁期である6月中は極めて悪
 かつた。このことは、太平洋側の本県沿岸域における3月以降6月までの親潮接岸分枝の発
 達による低温現象と一致する。今年の初漁期は日本海では5月19日で例年よりむしろ早か
 ったことと、津軽海峡域の大畑地区での漁況の遅れが目立つたことから考へれば津軽海峡東
 口からの寒流流水の張出しが強く、この時間において魚群の太平洋側への回遊を抑制したた
 めと考へられる。又太平洋系スルメイカ群についても親潮接岸分枝流の沿岸域への張出し状
 況から沿岸を北上する途中で抑制されたためと思われる。
- (2) 7月初旬以降は、前途のとおり急激に漁況が好転したが、漁場水温の変化が大きいことが

漁況の変動にも影響している。

- (3) 8月中も7月と同様資源水準は高かったが、道東方面に豊漁があり大型船の大部分が同海域に出漁し、本県沖合での漁船数は例年より少く、従つて単位漁獲量は昨年と同程度であつたが、漁獲量はあまり多くはならなかつた。
- (4) 9月中に例年のような漁切れ期がなかつたが、これは資源水準が極めて高かつたこと、初漁期の遅れが順次繰越される形となり、後続魚群の来遊と滞泳群が同海域の資源の豊度を高くしたためと考へられる。
- (5) 本年の秋イカ漁は10、11月までは好漁であつたが、12月には全く漁がなくなつた。このことは過去の漁獲との相関係から本水試では予測していたことであるが、生物学的な面から原因がつかめられていないのでこの点について今後更に研究を推進する必要がある。